

復興への思考

—エンジニア・アーキテクト諸氏へ—

エンジニア・アーキテクト協会会員／GS デザイン会議幹事長

中井 祐 (東京大学教授)

津波によって無に帰した三陸の被災市街地に立ったとき、がれきのむこうに広がる海は、不条理にも美しかった。しみわたるような美しさだった。

一説によれば、三陸は有史以来 90 回も津波を受けている、という。これまでにどれほどの人が死んできたのか、想像もつかないが、それでもひとびとはこの地に生きてきた。三陸ほどではないにしても、仙台平野以南でも、人がこの土地に住みついて以来、貞観はじめ、津波で亡くなった人は相当数いたはずである。いや、この日本という土地に生きる以上、今回の津波被災地だけが特別であるわけではない。東京も、東海から南海にかけての地域も、三陸の津波とおそらくおなじような程度の確率で、大地震に襲われるのである。明日にも、数万人が死ぬような天災がわれわれをみまうかもしれない。つまりこれは、日本人全体の生の問題だと思わねばならない。

三陸のある集落には、「津波はてんでんこ」という言葉があるという。津波がきたら、家族をかえりみず各自で逃げよ、という意味らしい。明治三陸津波のときに、家族がみな流されて全滅した家が多かった。生業を存続させるための村の教えである。ぎりぎりの局面においては、個々の生死よりも、個々の生を保証するより大きな生をつないでゆくことを優先せよ、ということだ。あまりにもつらい教訓だが、むしろそれが、生命というものの真実なのかもしれない。

天変地異という言葉がまったく大げさではない今回のような自然の力を目の当たりにして、いかに自分が(みずからの)死という自然にたいして目をそむけて生きているか、思い知らされる。もちろんわれわれはこれから、専門家の当然の責務として、いまを生きている個々の生をまもり、豊かにするための都市計画やまちづくり、個々の空間のデザインに力を注ぐことを、考えねばならない。しかしいま東北では、個々の生を超えたより大きな生をつないでゆくような生きかたを、暮らしの姿を、想像できるかどうか、むしろ問われているのである。それができなければ、三万もの犠牲が報われない。そういう思いがよぎる。

まちづくり 1000 年のよりどころとはなにか、と考える。おそらく 1000 年前も 1000 年後も変わらずにあるのは、三陸の海の恵みと美しい風景、そしてそこに営まれる人間の日常の暮らしだろう。そう、自然や風景とともにある日常こそが、われわれがこの土地に生きている、生をつないで生きていることの証である。日常に軸足をおいてものごとを

考え判断することが、いまほど大切であるときはないのかもしれない、と思う。

しかし一方で、それだけでは足りない、と切実に感じる。たとえば大槌では、市街に住む人のじつに三割近くが亡くなった。およそ三～四人にひとりの割合である。生き残ったなかに、家族や知人、友人を失っていない人を見つけることは難しいだろう。大槌を筆頭に、ほぼすべての被災地が、人のつながり、という日常をなりたさせる根本の部分に、致命的な損傷を受けている。

津波の被災地にばかり目が向きがちだが、こういうこともある。双葉郡広野という町に立った。福島第一原発からおよそ 20km、部外者が立ち入ることのできるほぼ限界の地点にある町である。浜辺は壊滅したが、中心市街地は無傷である。しかし、町は住民に避難指示を発令し、いまはだれもいない。

あたりまえであるが、人の日常の気配はまったくない。この、背筋を冷やされるような感覚は、その場に立ってみないとわからない。見るからに凄惨な大槌と姿はちがうが、しかしおなじように悲惨な現場である。広野町民はじめ原発影響圏内とされた地域のひとびとは、日常をなりたさせるもうひとつの根本である土地とのつながりを、突然に断ち切られたのである。

われわれエンジニア・アーキテクトは、デザインを通じてひとびとの日常をいかに豊かにできるかを、みずからに課してきた。それは決してまちがっていないが、いわば、日常ありきの世界のなかで仕事をしてきた、とも言える。しかし今回の震災は、その日常に、致命的損傷をもたらしたのである。ほんとうの意味で壊れたのは、市街地ではない。人と人とのつながり、人と土地とのつながり、つまりは人が生きてゆく、そして大きな生をつないでゆくための前提である日常そのものが、壊れたのである。日常を豊かに、というこれまでの志を変える必要はないが、いつもとは行動や思考のスタート地点がまったくことなること、したがって従前のデザインの方法そのままでは通用しないであろうことを、銘記すべきである。

すくなくとも東北の多くの被災地において、いまの段階で切実なのは、失われた日常をどのようにしてとりもどすか、ということである。これには時間がかかることを、覚悟しなければならない。あの日常は、どんなに願っても、もう二度と、戻ってはこないのである。大切な人や土地、風景とのつながりを絶たれた傷は、重く、深いだろう。

かりに、いまだれかが見栄えのする復興の絵を拙速につくって見せても、おそらく役にはたつまい。もちろん、高台移転やらエコタウンと言ってみたところで、しょせんは当座の手段、なんの希望にもならない。復興の具体像は、絶対に、日常をとりもどそうとする住民や漁民ひとりひとりの心のなかから汲みあげられた大切ななにかをもとにして、組み立てられねばならない。まずは、その大切ななにかをそっと汲みあげることから、はじめなければならない。

一方で急がれるのは、日常をとりもどすための最初の回路をつなぐことである。たとえ

ば三陸であれば、それぞれの町に応じた海の恵みと人の暮らしとの関係こそ、おそらくすべてに先んじてつなぐべき回路であろう（魚市場の仮設的開設などはその一例か）。それこそ 1000 年変わらぬ、この地における人と自然の関わりにはほかならないからである。それこそが、この地を個々に生きる、そして個々の生をつないで生きる生き方の、根本だからである。

復興への道筋は、人と海の回路を起点にして、ひとつひとついねいにその周縁の関係を修復し、切れてしまった回路をつなぎあわせ、必要な部分は再編成して、すこしずつ日常をとりもどしてゆく方法しかないと考える。もちろんプロのエンジニア・アーキテクトとして、そのすべてのプロセスにおいて、被災者が日常をとりもどしたその先にひろがっているべき豊かな日常の空間と風景のありかたを常に自問し、想像し、思い描き続けねばならないことは、言うまでもない。

人間が個々に生きるため、より大きな生を生きるために、デザインになにができるのか。人間のぎりぎりの局面において、われわれのデザインは力をもちうるのか。

それぞれのなかにあるデザインという概念を、行為を、方法論を、制度的枠組みを、さらに深く掘りさげ、あるいは解体・再構築していかなければ、この問いの前には、惰性か、あるいは絶望が横たわるばかりだと思う。

中井 祐（なかい ゆう）／東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻 教授

1968 年愛知県生まれ、埼玉県育ち。専門は景観論、公共空間のデザインとまちづくり。1993 年東京大学大学院工学系研究科土木工学専攻修士課程修了。主な著書に『近代日本の橋梁デザイン思想』、主なプロジェクトに岸公園（島根県）、片山津地区街路及び水生植物公園（石川県）、ベレン地区公園図書館（コロンビア・メデジン市）など。土木学会デザイン賞、土木学会論文賞等受賞。